2021 年度事業 中間評価報告書（NPO 法人愛のまちエコ倶楽部）

評価実施体制

内部／外部	評価担当分野	氏名（非公開）	団体・役職
内部	再評価全般	[redacted]	NPO 法人愛のまちエコ倶楽部 事務局長
内部	再評価全般	[redacted]	NPO 法人愛のまちエコ倶楽部 事務局次長

A）事業のアウトカムの進捗状況の評価

①　短期アウトカムの進捗状況

指標	目標値・状態	達成時期	これまでの活動をとおして把握している変化・改善状況
・移住者ヒアリング項目「支援拠点があることによる定住の安心感の変化」結果	・事前調査によるヒアリング結果より終了時ヒアリング結果で、安心感が上昇していること	2023 年 2 月	・改修作業中の状況を発信することで、どのような拠点を目指しているのかを知ってもらう機会になっている。反応として、既に利用を希望する問い合わせが 5 件以上あり、2022 年度下半期には運営をスタートさせたい。

・地域との関係性構築体制の構成図 ・関係性構築の具体的な事例（経緯も含む）	・地域との関係性構築体制の構成図提示 ・関係性構築の事例　提示	2023 年 2 月	・拠点のある集落の自治会役員との情報交換を進めており、地域側の求めるもの（裏の林の道整備など）もキャッチしていくことが必要だと感じている。 ・愛東まち協とうまく協働できることを探りたい。
・移住者ヒアリング「『生業ラボ』後の働き方の意識の変化」結果	・移住者ヒアリング「『生業ラボ』後の働き方の意識の変化」結果で新しい働き方の模索がある	2023 年 2 月	・大学ゼミ連携で、加工品づくりの実績はできた。移住者や新規就農者がメリットを感じる『生業ラボ』を目指すため、更なる事例づくりと改善の必要性を感じる。
・地域資源の生業づくりと企業または大学連携につながる動きの件数と内容	・地域資源の生業づくりと企業または大学連携につながる動きが３件以上あり、具体的な内容がある。	2023 年 2 月	・4 件（滋賀県立大学、龍谷大学、関西大学、近江未来塾）の大学連携はつくれたが、できれば企業連携の動きもつくりたい。
・移住者の「こんな暮らしを創りたい」に対して生まれ始めた共感や繋がり、具現化する動きの件数と内容	・移住者の「こんな暮らしを創りたい」に対して生まれ始めた共感や繋がり、具現化する動きが３件以上あり、具体的な内容がある	2023 年 2 月	・秋の運営開始の際に、共感や繋がりを感じる WS やイベント、拠点利用の促進キャンペーンが必要になる。
・『総働』の仕組みの体制図 ・『総働』の仕組みによる支援の事例と件数	・『総働』の仕組みの体制図提示 ・『総働』の仕組みによる支援の事例提示　件数５件	2023 年 2 月	・県の移住担当部署や、市の空き家バンクなど、新たに情報交換ができた団体もあり、事業終了時には体制図が描けそうである。

事業のアウトカムの進捗評価	評価結果の考察
事業のアウトカムの進捗の程度は、事業終了時には ☐ 短期アウトカムの目標値を上回っての達成の見込みがある ☐ 短期アウトカムの目標値の達成の見込みがある ☑ 短期アウトカムの目標値はおおむね達成できる見込みがある ☐ 短期アウトカムの目標値の達成は不透明である ☐ 短期アウトカムの目標値の達成は難しい と自己評価する	2022 年秋から利用開始を準備しており、目標値はおおむね達成できると考える。 これまで拠点改修作業をメインに注力していたが、開始に向けた広報や WS、利用推進キャンペーンなど企画を進めていく段階に入っている。

B）事業の改善状況の評価

①　事業の実施過程・事業改善に関する評価

評価項目	評価小項目	評価結果	考察
実施状況の適切性 実施状況の適切性	活動は計画どおり実施されているか	2021 年度末報告書より アウトプット進捗状況	
	【1】空き家などを確保・改修し、移住者を包括的にサポートする支援拠点が完成している。	現在、スタッフを中心に支援拠点をワークショップを開催しながら 2 階部分を DIY で改修中。2022 年 6 月に改修終了予定。	【目標値】支援拠点の整備完了 →・空き家の確保…完了 ・改修作業… 6 月完了目指して進めている。 概ね 70%
	【2】支援拠点に、移住前の交流型滞在『お試しステイ』のための宿泊設備が整い、利用が進んでいる。	34 名の宿泊客。2 階の施工は完成していないが、一階部分に宿泊してもらい大学の合宿などで利用してもらっている	【目標値】交流型滞在『お試しステイ』の利用者数　15 人 →・運営開始前だが、大学連携の関係で宿泊利用の実績をつくっている。 34/15 人≒227%
	【3】支援拠点から地域との交流を進めるための地域活動や農業ボランティア・研修などのプログラムを作成し、提供している。	農業体験プログラムの名前を「土と暮らしと」に変更しブランディングを行った。プログラム数は 7 つ。藁細工体験で 21 人の参加。	【目標値】支援拠点で提供する地域交流プログラムの作成数　30 個、地域交流プログラム参加者数 15 人 →・『土と暮らしと』プログラム 7 個　参加者　60 人 ・新規就農研修プログラム 3 個　参加者　3 人 ・わら細工体験プログラム 1 個　参加者　21 人 ・現在東近江市企画課と就農移住ツアープログラム作成中 11/30 プログラム≒37% 84/15 人≒560%

		【4】支援拠点に生業創出のための設備『生業ラボ』として、飲食・加工品製造、宿泊、シェアオフィスなどの設備が整っている。	合計５件 ① 滋賀県立大学平岡ゼミ「東近江ダーバープロジェクト」計３回開催。 ② 「龍谷大学深尾ゼミ×政所茶×グラノーラ専門店 yamagoya ×当団体」のコラボ企画を開催。地域資源を使った商品開発。 地域資源である竹を使ったテント作り	【目標値】『生業ラボ』の利用件数　６件 →飲食・加工品製造場所は整備中であるが、大学連携の流れで商品開発の実績が１件 1/6 件≒16%
		【5】地域資源の生業づくりをテーマにした合宿やシェアオフィスの場の提供で、企業や大学をサポート拠点に誘致することが出来ている。	合計：4 件 滋賀県立大学、龍谷大学、関西大学、近江未来塾。ワーケーション実施、東京の企業に勤める 20 代の男女３名の利用。企業誘致が課題。	【目標値】企業または大学関連利用誘致　５件 →・大学ゼミ等連携４件 ・企業連携０件 4/5 件≒80%

		【6】ローカルな「暮らし・働き方」をテーマにした講座やワークショップを開催し、移住者を中心とした参加がある。	開催数：10 回 参加者：96 名 内容 ・11/6 でんでけでん×豆の数だけ抱きしめて収穫祭　15 名 ・11/26 だれんち DIY　W.S 9 名 ・11/22 滋賀移住計画　移住ツアー3 名 ・11/20,21 竹つくり W.S 10 名 ・11/28 京都府立大学生だれんち DIY W.S 3 名 ・12/4 小さな旅いち　10 名 ・12.5 藁細工 W.S 22 名 ・12.17 だれんち DIY W.S 6 名 ・12.18 おかえり信州カブ 10 名 →雪で移動 2022．3/25 だれんち DIY W.S 8 名	【目標値】講座・ワークショップ ・開催数　10 回、参加延べ人数　100 人 →・DIY を中心に WS 開催 10 回　参加者 96 人 ・秋の拠点運営開始を機会に広報を兼ねた WS 企画を進めていく。 10/10 回＝100% 96/100 人＝96%

	【7】支援拠点の事業主旨を行政各課や関係団体と共有出来ており、移住者に向けた支援の『総働』の体制準備が出来はじめている。	・愛東湖東就農支援協議会『なこーど』での情報共有、連携 ・東近江市観光協会連携確認 ・東近江市企画課「就農移住ツアー企画」 ・愛東まちづくり協議会との連携（まちづくり基本計画ワークショップの会場利用、移住者の意見交換会の合同計画） ・（公財）滋賀県農林漁業担い手育成基金との就農者支援連携の相談 ・滋賀県農村振興課との移住者支援連携「農山村のお試し移住プラン」協力、県 HP 掲載	【目標値】・支援拠点の主旨説明・連携依頼した団体数　20 団体、意見交換会の参加団体数 10 団体 →・東近江市農業水産課、JA 湖東、県農産普及課、一財愛の田園振興公社、農業委員会、東近江市観光物産課、東近江市観光協会、愛東まちづくり協議会、東近江市企画課、滋賀県農林漁業担い手育成基金、滋賀県農村振興課、滋賀県総務部市町振興課、東近江市住まい創生センター、淡海ネットワークセンター、しがトコ 15/20 団体連携≒75%
	今後留意していかなければならないことは何か	・秋の運営開始のタイミングでの広報や利用促進に向けた企画の打ち出し方 ・自走に向けた収益事業確保の計画	・9～11 月に打ち出すオープン企画を 7 月までに詰めていく。 ・団体内で新たに設立した『だれんち未来会議』で今後の自走に向けた事業計画を詰めていく。

知見の共有、活動の改善	アウトプット発生に影響を与えた阻害要因、貢献要因は何か	【阻害要因】 ・コロナ感染症によるイベント自粛や WS 中止 ・資金の関係から、拠点改修にセルフリノベーションを選択したので、予定が遅れ気味である。 【貢献要因】 ・ワーケーションや移住が時代の Keyword になったことで、問い合わせや連携依頼が入ってきた。	【阻害要因対応策】 ・オープン企画に向けて、柔軟に延期や中止ができるように小規模なイベントや WS を検討する。 ・リノベーションを指導いただく方に、日数を追加してもらい、スピードアップをはかっている。 追い込みに向けてマンパワー増強を検討中。 【貢献要因の活用】 ・オープン前の問い合わせや連携もつながりをしっかりつくり、運営開始に生かしていく。 問い合わせ者や連携希望団体の要望も都度ヒアリングしておく。
組織基盤の強化	事業の運営管理体制に問題はないか	・進捗の共有や役割分担が明確でなかったため課題があった。	団体内での情報共有や業務の再分担を行い改善しつつある。
組織基盤の強化	地域内で新たに構築された人や団体との協力、連携関係はあるのか		滋賀県農林漁業担い手育成基金…新規就農情報共有 滋賀県農村振興課、しがとこ…農山村のお試し移住プラン 東近江市住まい創生センター…空き家移住についての情報交換 滋賀県総務部市町振興課…移住 PR『滋賀ぐらし万華鏡』 淡海ネットワークセンター…移住希望者に向けた発信 ６団体との新たな連携あり。

② 短期アウトカムの状態の変化・改善に貢献した要因や事例

＜貢献要因＞

・ワーケーションや移住が時代の Keyword になったことで、問い合わせや連携依頼が入ってきた。

・改修作業中の状況を発信することで、どのような拠点を目指しているのかを知ってもらう機会になっており、既に興味のある方からの問い合わせもある。

＜事例＞

2021 年度末報告書　参照

③ 事前評価時には想定していなかった成果

・拠点改修をセルフリノベーションする中で、古い家屋の構造を大切にする設計士さんの協力を得ることになった。

地元東近江市の永源寺の木材利用や、当 NPO が生産しているくん炭を断熱材として利用するなど、拠点家屋の中にも環境 NPO としての思いを投影できる機会となった。

④ 事業計画の改善の必要性の確認

- ☑ 社会課題のニーズに事業計画の内容は合致している
- ☑ 受益者や事業対象グループのニーズに事業計画の内容は合致している
- ☑ 事業計画に記載している活動は、アウトプット⇛アウトカムへのつながりが実際に確認できている
- ☑ 残りの期間の資金配分・人員体制・スケジュールは活動を円滑に行えるよう計画されている
- ☑ 短期アウトカム指標は、事後評価時に測定し、達成度を評価することが可能な内容になっている

事業の改善状況の評価結果	評価結果の考察
残りの事業期間で、事業が短期アウトカムを達成するために ☑ 事業計画は適切に改善されたといえる ☐ 事業計画を適切に改善する見込みがある ☐ 事業計画の改善について、課題が残っている と自己評価する	・事業計画に特に問題はない。

添付資料

1.中間評価実施前の事業計画（必須）

2.評価計画書